



復興への願いを込めたバルーンリリース。約3000個の風船が阿蘇の夜空に上がった。(阿蘇体育館にて)

るさと。 さんを**元気**に。

観測史上最大の大雨は、黒川など河川の氾濫を招いた。内牧地区を中心に浸水被害が相次ぎ、阿蘇市の観光業にも大きな影を落とした。阿蘇温泉観光旅館組合に加盟する半数以上の旅館・ホテルは休業を余儀なくされた――

22の旅館・ホテルが加盟する阿蘇温泉観光旅館協同組合理事長の稲吉淳一さん。災害当時、仕事で東京に行っており自身で経営するホテルの従業員から一報を受けた。ホテル内には泥を

含んだ水が流れ込み、成人男性の胸の高さほどまで浸水。ロビーのじゅうたんは全て剥がれ、自動販売機や調度品は流され「初めは何がなんだかわからない状態」と振り返る。

前日から250人以上の宿泊者があり、避難誘導や食糧、飲料水の確保に追われたが、宿泊者から「心配しなくていい」と声をかけられ、その言葉で落ち着いて対応することができたという。

ボランティアの人たちには頭が下がる思い

22軒のうち15軒の旅館・ホテルが床上浸水などの被害に遭い休業が続いた。稲吉さんの経営するホテルも約4カ月にわたり休業。災害直後には多くのボランティアが訪れ各所で作業にあたった。「名も知らない方々が『手伝わせてください』と言って来てくれた。一生懸命作業をしてくださり本当に感謝の気持ち



ホテル内に駐車された車は、水で押し流された。

「あんなに話さない」と話す。ことし4月25日に内牧地区で休業していた最後の旅館が営業を再開し、内牧地区の全ての旅館・ホテルが再開した。

5月には、阿蘇市の旅館・ホテルの料理人をつくる『阿蘇料理維新の会』の朝ごはんが好評の阿蘇マルシェが再開し、毎月、県内外から多くの観光客が訪れ賑わいを見せている。「料理人が表に出てお客さまと接するということに意味がある。マルシェでは、その他の業種との相乗効果も期待できるし、再開できて良かった」と話す。

Interview

いなよし じゅんいち

稲吉 淳一 さん

Inayoshi Junichi

阿蘇温泉観光旅館協同組合 理事長
阿蘇プラザホテル 代表取締役社長
44歳、行政区：内牧2区



内牧温泉は心のふ おもてなしでお客様

復興への
感謝の気持ちを込めて

災害から1年という節目に旅館組合が実施しているのが阿蘇復興感謝キャンペーン。「この一年を振り返り旅館業は自分たちだけでは成り立たないということが改めて分かった。支援をいただいた地元の方やボランティア、宿泊者に何かできることはないか」とキャンペーンを展開。宿泊者向けに配る『阿蘇元気米』は、受け取った誰もが喜んでくれるという。

ちょうど一年にあたる7月12日には、復興への想いや感謝の気持ちを記した風船を飛ばすバルーンリリースを開催。会場の阿蘇体育館には3000人を超える人たちが参加し、それぞれ思いを風船に込めた。『花火よりも

きれい』という声もあり素晴らしいイベントになった」と振り返る。

これから目指す
内牧温泉のカタチ

「阿蘇の旅館ができることは、都会などからの疲れた人を癒して、元気になって帰ってもらいたい。そういう意味で、元気を循環する『元気循環型』の温泉地を目指したい」と稲吉さん。「旅館組合としてますます一致団結して明日に向かって頑張っていきたい」と意気込む。

最後に、稲吉さんにとって内牧温泉とは？と尋ねるとこう答えて返ってきた。「これだけの素晴らしい風景があり、四季折々の季節感を感じさせるところは他にはない。内牧温泉は僕の元気の源です！」
災害を経験し、多くの人たちに支えられた内牧温泉は力強く新たなスタートを切った。

未来のために 何ができるか。

Interview

まえはら とむ

前原 土武 さん

Maehara Tom

災害 NGO 結~ゆい~

災害復旧・復興支援
コーディネーター代表
35歳、出身地：沖縄県



「地域が地域のために復旧復興
することが、本来の地域の力」

そう語るのは、災害復旧・復興支援コーディネーターとして活動する前原土武さん。東日本大震災でのボランティア活動をきっかけに、たった一人で立ち上げたのが「災害NGO結」。それまでラフティングガイドとして国内外で働いていた前原さんは、アウトドアでの危険な場面に幾度となく遭遇し、仕事柄、水の恐ろしさを熟知しており、東日本大震災での逃げ惑う人たちの映像をテレビ越しに見て「いてもたってもいられなかった」と、仕事を休職して災害現場に入ったと話す。

災害時は現場を知ることから始まる

昨年7月12日の九州北部豪雨時に宮城県で活動をしていた前原さんは、九州北部の各地で大雨による災害が起きていること

を聞きつけ、その日のうちに車を走らせ翌13日に熊本県に入った。「熊本県の地図を広げると、川の始まりが阿蘇ということを知り、ものすごいことになっていくかもしれない」と直感し、すぐに阿蘇に向かったという。

阿蘇に入ってから「現場を知ることが先決」とすぐに阿蘇市内を駆け回り状況把握に努めたという前原さん。「多くの災害ボランティアセンターは、運営することに手いっぱい現場が把握できていないことが多い」と問題点を指摘する。阿蘇市での活動でも、支援を必要とする派遣先での役割や現場の状況などを常に把握し、社協のスタッフと活動を続けたと振り返る。

**阿蘇の人の優しさは
本当にありがたい**

阿蘇に入って最初に訪れた場所は一の宮町手野地区。土砂災害が多数発生し、5人が亡くな

1



- 1 7月15日には、『ひまわり大作戦』と題して、熊本市と西原村の中学生180人を招き、一の宮町手野と小里の畑にひまわりの苗を植えた。できた種は福島県の福祉施設に贈る。
- 2 学生を阿蘇市に招いて、災害時のようすを説明する前原さん（一の宮町坂梨）。

2



り市内でも被害の大きかった地区だ。平成23年9月に台風12号による大きな被害のあった和歌山県那智勝浦町で土砂災害の支援経験のある前原さんは、手野地区の被害の光景を目の前にして「これは復興までに時間がかかる」と感じたそう。だからこそ「地域の人やそれ以外の人々が長く支援する体制が必要だ」と訴える。災害ボランティアセンターが閉所してもなお活動を続けるのはその理由からだ。長く阿蘇で活動すること、市民とのコミュニケーションも

深まり、特に坂梨や古城地区で前原さんを知らない人はいないくらいだ。前原さん自身も地域の人との交流を大切にしている。「もう阿蘇に住みなっせ」と声をかけてもらえるのが嬉しいと話す。「自分のことを誰も受け入れてくれたおかげで、今もこうやって活動ができる」と阿蘇の人の優しさを感じている。

災害の記録を後世に

現在、取り組んでいるのは災害記録集の制作だ。きっかけは平成2年の7・2水害という。昨年の災害で地域の人々が口々に「7・2水害のことに触れ、約20年前に災害が起きたということを知り図書館で調べようと思っただけ、ほとんど記録として残されていなかった。「災害の怖さを知らなければ、防災・減災が分からない。今回の教訓を生かすために災害の記録を残すことで防災・減災の意識に繋がって

いけば」と4月から制作を始めた。

記録誌のテーマは『伝えよう未来へ（こどもたちへ）』。「この災害で亡くなった人たちの死が無駄にならないように後世に伝えて、今後起きる災害で少しでも被害が少なくなれば」と記録集に思いを込める。この記録集は9月を目途に発行する予定だ。

「阿蘇は力強いし、大好きなところ」と、もうしばらくは阿蘇で活動を続けたいと前原さん。「防災意識の高い行政を目指してほしい。そして住民の意識も高まるのが理想」と語る。「止まない雨はない。辛いこともあるだろうけど必ずいいこともある。そのためにもボランティアが残って支援し続けたい」。

たった一人で阿蘇にきた前原さんの周りには多くの支援の輪が広がり、今後も阿蘇への支援は続く。